



株主の皆様へ

2011年度第2四半期のご報告

2011.4.1→2011.9.30

こあ株式会社



明日をつくる笑顔、をつくる。
今こそ、エンタテインメントの力を。

MESSAGE

平素より格別のご高配を賜り、厚く御礼申し上げます。ぴあグループの2011年度上期決算をご報告するにあたり、ひと言ご挨拶を申し上げます。

まずは、今年3月に発生しました東日本大震災にて被災された皆様に心からお見舞い申し上げますとともに、被災地の一日も早い復興をお祈り申し上げます。ぴあグループでは、私どもの事業領域でもあるエンタテインメントを通じて、被災地の復興を支援するプロジェクト「TEAM SMILE」を4月より立ち上げ、今後さまざまな支援活動を継続してまいります。

ぴあグループの当連結会計年度におきましては、4期ぶりに連結黒字化を達成しました昨年度に引き続き、事業基盤の盤石化を経営の最優先課題とし、2期連続の黒字を目指して経営努力を積み重ねております。東日本大震災によるレジャー・エンタテインメント市場への影響を考慮し、上期決算では赤字予想をさせていただいておりましたが、主力であるライブ・エンタテインメント関連事業では、大型興行の延期開催等により、上半期は売上・収益ともに堅調な結果となりました。一方のメディア・コンテンツ事業でも、7月に休刊いたしました情報誌「ぴあ」（首都圏版）の最終号が大きく売上を伸ばし、連結業績でも、当初予想を大きく上回る業績で終えることができました。

しかしながら、震災によるイベントの自粛ムードは緩和されたものの、特に外出型レジャーに対する需要

が依然として冷え込むなど、今後も不透明な状況が続くものと予想し、通期予想は当初予想値のままとさせていただきます。

末筆ではございますが、情報誌「ぴあ」の休刊にあたりましては、1972年の創刊以来、39年にわたる温かいご支援、ご愛顧に対し、改めて深く感謝申し上げます。新聞、テレビなどほとんどの主要メディアをはじめ、数多くの方がツイッター、ブログ等でもこのニュースを取り上げて下さり、皆様の愛情あふれるコメントを感慨深く拝聴、拝読いたしました。来年、弊社は創業40周年を迎えます。情報誌としての「ぴあ」はその役目を終えましたが、皆様に育てていただいた「ぴあ」のDNAを活かし、来期に向けてさまざまなイノベーションに取り組んでまいりたいと思っております。

株主の皆様におかれましては、引き続き温かいご理解とご支援を賜りますよう、謹んでお願い申し上げます。

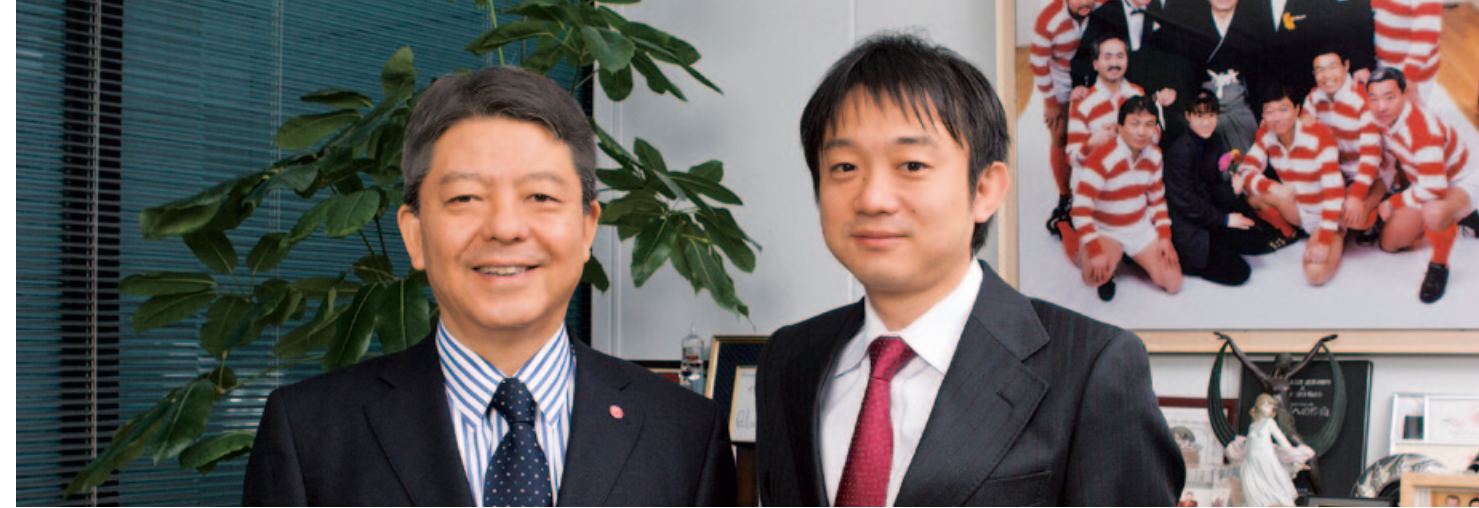


代表取締役社長

矢内 廣

VISION <対談>

第二のインターネット時代に生きる ぴあのコンセプト



矢内 廣
Hiroshi Yanai
ぴあ株式会社
代表取締役社長

武田 隆
Takashi Takeda
株式会社エイベック研究所
代表取締役

プロフィール

1974年1月生まれ。海浜幕張出身。日本大学芸術学部にてメディア美学者 武邑光裕に師事。「日本の伝統芸術とマルチメディアの融合」を学ぶ。1996年、学生ベンチャーとして起業。クライアント企業各社との数年に及ぶ共同実験を経て、ソーシャルメディアをマーケティングに活用する「企業コミュニティ」の理論と手法を独自開発。2000年エイベック研究所を株式会社化。その後、自らの力で2,000社の企業を回る。花王、カゴメ、ベネッセなど業界トップの会社から評価を得て、累計300社のマーケティングを支援。ソーシャルメディア構築市場における売上トップシェア*を誇る。

*2010年企業運営型BtoCコミュニティサイト構築におけるパッケージ・ASPメーカー出荷金額ベース（株）矢野経済研究所調べ 2011年8月現在

インターネットによって地球が一つになっていく

矢内：先日、武田さんが書かれた『ソーシャルメディア進化論』を拝読し、共感を得るところがたくさんありました。この方はいわゆる技術系の人の

発想ではないな、と思ってプロフィールを拝見すると、芸術学部のご出身ということで妙に納得したんですね。まず自分がやりたいことがあって、それをコンピューターに託そうとしているのだ、と思いました。

武田：僕がインターネットに出会ったのは学生時代の94年ごろですが、当時はインターネットが世界中の人に使われるようになることに誰も確信を持っていなかったのではないかと思います。モノ作りが好きで芸術学部を選びましたが、作ることは同時に批評にさらされる世界でもあり、僕にとっては閉塞感があった。そんな時にパーソナルコンピューターが世に出てきたわけです。それがアップルのマッキントッシュだったのですが、デジタルに落とし込むというのはフラットにするということであり、新しいものも過去のものも、メディアや芸術といった境界が異なるものも、コンピューターに落とせば簡単に紡ぎ合わせられるのだ、ということに気付いた時にはすごく興奮しましたね。

矢内：武田さんは、コンピューターという道具を使って何ができるのだろうかという発想されたんですね。

武田：興味を持って調べていくと、「個人の表現力や思い、アイデアを世の中に拡張させるために生まれた。だからパーソナルコンピューターと名付けられた」と知って、自分はずいぶんと発見したと思いましたね。イン



ターネットが日本に入ってきた当初は回線も遅いし、サイト数も少なかったけれど、だからこそジョン・レノンの「イマジン」ではないですが、地球が1つになっていくかもしれないという感動がありました。

脅威に感じたからこそいち早く使ってみた

矢内：僕がコンピューターに初めて出会ったのは70年代後半に登場した「キャプテンシステム」でした。自分が必要としている情報が、電話機のプッシュホンをとたけばテレビのディスプレイに引き出せるというもので、僕はそれにとても驚き、「ぴあ」のような情報誌は必要なくなってしまう、新しいメディアに取って代わられるに違いないという脅威を感じて、当時の電電公社と郵政省が始めた実証実験に自ら加わりました。新聞社やテレビ局も全て参加していましたが、月間の使用画面数が新聞社でさえ2百～3百画面ほどだったのに対して、ぴあは2万～2万5千もの画面を提供しました。「ぴあ」が紙メディアの上でやってきた仕掛けが、デジタルの世界ならもっとできるのではないかということを試してみたかったんです。半年ほどで、それが「ぴあ」に取って代わるメディアにすぐにはならないと判りましたが、その時に初めてコンピューターというものに出会い、これからは大変な時代になるなと感じたわけです。それを機に、80年にはいち早く「ぴあ」のコンピューター編集をスタートさせました。それが結果的に「チケットぴあ」に繋がったわけです。これが、雑誌を出している会社が一定飛びにチケットを売るようになった背景なんです。

武田：先見の明でコンピューターをいち早く使ってみるという試みが、「チケットぴあ」に繋がったわけですね。そもそもコンピューターは、ひとりひとりの表現力をもっと拡張させようと作られたわけで、インターネットは地球全体にわたるコミュニケーションを拡げていくためのものなのですよ。先般、仕事で被災地の方にお話を伺ったのですが、震災を機にイ

ンターネットについての思いが変わったと皆さん仰っていました。これまで、情報を得るための便利で冷たい道具、という印象を持っていたのが、インターネットの向こう側には生身の人間がいて、実はOne to Oneのあたたかなコミュニケーションがとれるものなのだと。

矢内：どちらかというコンピューターは機能性を追求されることが多いですが、まさに武田さんの著書では「心あたたまる関係と経済効果の融合」というのが大事なテーマとして語られていますね。

武田：しかし、あたたかいと言っているだけでは商売にはなりません。最初は企業のWebサイトを作って収入を得ていましたが、やればやるほど本来のインターネットから離れていくというか、サイトを作るだけでは人と人は繋がらねえんだと感じるようになり、その仕事を辞めてソーシャルメディア1本に絞ろうと決めました。

「ぴあ」でやりたいことはまさにこういうことだったんだ

矢内：インターネットが世の中に登場した時に僕は、「ぴあ」でやりたいのはこういうことだったんだと思いました。インターネット上では全てがフラットなわけで、メジャーな情報もマイナーな情報も同列に並べる、情報の送り手と受け手の関係性がいつでも入れ代わる、クロス検索を可能にする…と、実は「ぴあ」は全て紙の上で同じことをしていたんですよ。ソーシャルメディアとは、顔も見えない人同士が繋がり、それが広がって1つのコミュニティが作られるということ。これはデジタルの世界から始まったものではなく、アナログの時代から作られていたはずで、人間が求めているものは変わるものではない。そう武田さんも著書に書かれていて、それにも大変共感しました。

武田：インターネット業界には「タイムマシン経営」という言葉があって、コンピューターはまずアメリカでイノベーションが起き、それをいち早く日本に持ってくれば成功する、つまりスピーディーにコピーすることが成功パターンだったんです。ところがソーシャルメディアの世界では、人と人がどう繋がるのかということにシフトチェンジしています。コンピューターの世界がシステム優位から明らかに変わってきているということですよ。

矢内：最初は技術の勝負、それから情報の勝負、これからは場、繋がり勝負に変わると武田さんは仰ってますね。去る11月3日に、幕張メッセで「ぴあ」休刊を記念したライブイベントを開催しましたが、出演した人気アー

ティストたちがステージ上で、「自分達は『ぴあ』に育ててもらった」「どんなに小さくても自分の名前が出ると大騒ぎし、表紙になった時には大感激した」と話してくれました。会場ではアーティスト、観客、ぴあという3つにある種の一体感が生まれていて、これこそが見えないコミュニティなんだと感じました。

武田：それはまさに、「ぴあ」が繋がりを支援してきたということですよ。読者の方は「ぴあ」で情報を見つけてライブハウスや劇場に足を運び、同じ趣味や価値観を持った人と出会うわけです。そこには確かにコミュニティが存在していたんだと思います。インターネットが便利な情報検索データベースとして扱われた時代から、今はソーシャルメディアを中心としたコミュニケーションツールとして変わってきた。人と人の繋がりをサポートしてきた「ぴあ」の本質は、この第二のインターネット時代とかなり適応するはずで、むしろ紙の上よりソーシャルメディア上の方がずっとやりやすいのではと思います。

ぴあのコンセプトにインターネットが追いついた

矢内：ぴあの企業理念「ぴあアイデンティティ」には、経済性と趣旨性を両立させる、ということが最初に書かれています。「経済性」というのは利益を出すこと。それは会社として当然のことなわけですが、それだけで本当に良いのか。世の中はこうあるべきだと思うこと、つまり「趣旨性」も合わせて我々は追求すべきだということです。それは武田さんが仰っている「心あたたまる関係と経済効果の融合」と符合するなと思いました。

武田：儲ける方法はいくつもあるでしょうが、どうやって儲けるかという話ですよ。同じくぴあの理念には「ひとりひとりが生き生きと」という言葉があります。最近成功した事例の1つに、イギリスを代表するブランドのバーバリー (BURBERRY) がトレンチコートにフォーカスした「アート・オブ・ザ・トレンチ」というWebサイトを立ち上げて以降、トレンチコートの販売数が約7倍に増えたという話があります。トレンチコートを着た一般の人たちの写真がサイトにひしめいて、スタイルが良い人もそうでない人も、老若男女がその着こなしを披露しています。これを撮影した写真家のスコット・シューマンは、インタビューで「私はファッションではなくスタイルを撮っている。それを着ようと思った心の背景にあるその人の個性、人生を写しているのだ」と。これが今インターネットですごくうけているコンセプトなんです。ソーシャルメディアというのは、誰もが等



身大の自分を素直に出せるものであり、それが集まると多様性が見えてくる。“ひとりひとりが生き生きと”は、私に言わせれば、インターネットのソーシャルメディア時代を半ば予言的に語った言葉なんです。矢内：勇気づけられる話ですね。僕にしてみれば予言的に使ったつもりもないですし、その頃はインターネットがここまで短時間で広がってくるとは考えてもいませんでしたから(笑)。

武田：「ぴあ」という雑誌は、どんな小さな公演でも表現者が発表したいと言えば掲載でき、それを見た読者が実際に足を運び、同じく足を運んだ人に出会うことができました。当時、そのようなことをやり遂げたところはなかったでしょう。それはまさしくコミュニティの支援なのです。これまでのぴあを振り返ると、網羅された情報データベースとしての“ぴあ”と、それを使ってコミュニティを支援してきた“ぴあ”という2つが回っていたように私には見えます。この15年、その網羅性がどんどんインターネットに代替され、有料だった情報が無料になっていくプロセスは、ぴあにとっては厳しい時代だったと言えます。しかし、インターネットがコミュニティ支援を求めようになった今の時代には、ぴあのもう片方の役割が強求められるのです。「ぴあ」という雑誌も、「ひとりひとりが生き生きと」という企業理念も、これほど表立ってコミュニティ支援を行ってきた会社は他にはないと思います。つまり、ぴあのコンセプトにやっとインターネットが追いついたということでしょう。

矢内：幸いにもインターネット上の会員「ぴあ会員」は930万人(2011年10月末)を超えていて、それも大きな強みになるんだろうなと思います。来年はぴあ創業40周年という節目の年を迎えます。今年は情報誌の「ぴあ」を休刊し、来年はまさに新しい“ぴあ”を創っていく大事なタイミングでもありますし、今日武田さんとお話できたことを弾みにしてやっていきたいと思っています。ありがとうございました。

情報誌「ぴあ」最終号発行 休刊ライブイベントを開催 ゆず・ドリカムら出演

1972年7月に創刊し39年にわたり発行してまいりました情報誌「ぴあ」が、2011年7月21日発売号をもって休刊しました。最終号の発売に際しては各種メディアにも数多く取り上げられ、読者の皆様からはツイッターやブログを通して休刊を惜しむ声を多数頂戴しました。11月3日(木・祝)には、これまでご愛読いただいた皆様への感謝を込めたライブイベント「ぴあ39th FAREWELL “39-THANK YOU-” ～車輪小僧の大回転～」を千葉・幕張メッセにて開催。ASIAN KUNG-FU GENERATION、エレファントカシマシ、氣志團、スキマスイッチ、トータス松本、DREAMS COME TRUE、ゆずといった、ぴあにゆかりのあるアーティスト計7組が熱演を繰り広げ、当日は2万人のお客様にご来場いただき大いに賑わいました。



チケット販売において 7&iグループとの連携を更に強化

チケット販売において7&iグループとのアライアンスを更に強化しています。2011年9月には7&iグループのネット通販サイト「セブンネットショッピング」にて、「チケットぴあ」の販売サービスを開始。アーティストグッズやガイドブックなどとともに、チケットをお求めいただくことが可能になりました。また11月には、タワーレコードとCD販売、及びチケット販売で協業。タワーレコード渋谷店とタワーミニ汐留店にチケットぴあカウンターを設置し、より立体的なアーティストプロモーションを展開しています。7&iグループの様々な業態と連携することで、エンタテインメントに関するアイテムをよりトータルにご提供し、エンタテインメント領域における生活インフラの構築を着実に進めています。



Web・雑誌・店舗が連動した 新サービス「ウレぴあ」スタート

Web・雑誌・店舗を連動させたユーザー参加型の新たなビジネスモデルの創出を目指し、2011年10月25日より、ぴあの新サービス「ウレぴあ」がスタートしました。“ウレるを実感、ウレしいを共感”をコンセプトとした「ウレぴあ」は、エンタテインメント性のある商品・サービス情報を紹介し、読者の方の購買・消費意欲を喚起することで、ECサイトやコンビニエンスストア等を含む店舗へと誘います。Webサイト「ウレぴあ総研」では、トレンド情報の発信やユーザー調査、ソーシャルメディアと連携した消費者意識の抽出・分析を行ない、雑誌「ウレぴあ」では同サイトと連携し、商品・サービスを独自の切り口で評価するとともに、その魅力を深掘りしてご紹介しします。スタート時にはキャンペーンの一環として、東京・大阪・名古屋の3都市61箇所、1万人を対象としたインタビュー形式のアンケートを実施。カラフルな衣装を身にまとった「ウレぴあ」調査隊が街を練り歩き、各種ソーシャルメディア上でも話題を集めました。



スタート時のキャンペーンの様子



「チケットぴあ」Web APIが好評

2011年5月にスタートした「チケットぴあ」Web APIサービスが好評です。8月には博報堂DYグループのMedia JUMPが提供するイベント情報サイト「キタコレ!」、11月にはリクルートのグループ会社が運営する個人の嗜好性に基づき各種リコメンド情報をお届けするスマートフォンアプリ「Wityou (ウィジユ)」、また韓国のドラマ・芸能情報配信サイト「WoW!Korea」に導入されるなど、ぴあのチケット情報・販売機能が他社の様々なWebサイト・アプリにて展開されています。

日本初※! イベントチケット保険サービスを開始

「チケットぴあ」Webサイトでのチケット購入者を対象に、急病等によりイベントを観覧できなくなった場合、不使用のチケットの代金を全額補償するイベントチケット保険、チケットぴあ「チケットガード」の販売を2011年9月末よりスタートしました(対象エリアは順次拡大予定)。同サービスはぴあが保険代理店業務を担い、チケットガード少額短期保険株式会社を引受保険会社として提供。チケット購入後のキャンセルはできないという興行界の商慣習が存在するなか、日本国内では初となる革新的なサービスとして注目を集めています。多忙なビジネスマンやご家族連れのお客様でも購入しやすい環境を整え、チケット販売の更なる拡大に繋げてまいります。(募集文書番号: 1111TK13301-46)



※2011年5月現在。個人向け損害保険商品において。チケットガード少短(株)調べ。

エンタメで日本を元気に 震災復興プロジェクト「TEAM SMILE」を展開中

2011年3月に発生した東日本大震災を受け、社内の有志からの呼びかけにより4月に発足した震災復興プロジェクト「TEAM SMILE」。「元気や笑顔」を生み出すことを目標に掲げ、エンタテインメントを通じた様々な活動を積極的に展開しています。3月に開催された日本代表とJリーグ選抜によるサッカーチャリティマッチの試合映像等を記録したDVD-BOOKを6月に発売し、販売収益を義援金として寄付。8月には東北地方の太平洋沿岸で行なわれた被災地復興支援花火イベント「LIGHT UP NIPPON」にてチケット販売システムを活用した募金受付スキームを提供。また同月に行なわれたロック・フェスティバル「SUMMER SONIC」等では古着を扱うフリーマーケットのブースを出店し、その収益を寄付しました。



明日をつくる笑顔、をつくる。今こそ、エンタテインメントの力を。



休刊ライブイベントでもブースを出店

「チケットぴあ スマートフォンサイト」がスタート

携帯電話に代わる端末機器として急速に普及率を高めるスマートフォン。他社に先駆け、2011年11月よりスマートフォンにてチケットをお求めいただける「チケットぴあ スマートフォンサイト」をスタートしました(Android、iPhone)。パソコンと同様の情報を検索・閲覧できるため、外出先からでもより簡便に、快適にチケットをご購入いただけます。時代の変化に合わせ様々なデバイスに最適なコンテンツ・サービスを提供し、お客様の利便性の向上を図ります。(ぴあのチケットティングシステムをASP提供している、興行主催者が運営するチケット販売サイトにも順次提供予定)



付録付きMOOK本等を続々と刊行

TV番組や人気キャラクターと連動したMOOK本に続き、新たな取り組みとして付録付き出版物を刊行しています。2011年9月にはモバイル美容家電の人気商品である携帯型ミスト美顔器「うるおい美肌ケータイミスト」を発売。また、10月には昨今ブームとなっている干し野菜が簡単に出来る干し野菜ネットとそのレシピを紹介した「ちょっと干すだけで驚くほどおいしくなる 干し野菜レシピ」を発売するなど、生活領域に密着した商品を取り上げご好評いただいています。



夏場の節電対策に協力 観光庁等が推進する 「ポジティブ・オフ」運動にも賛同

東日本大震災による東京電力管内における夏場の電力不足に備え、ぴあ本社でも節電対策に協力。エアコンの設定温度の調整やオフィス内の照明間引き等を実施しました。また、今般の電力供給対策を契機に7月に発足した、観光庁等が推進する、休暇を取得して外出や旅行を楽しむことを積極的に促進する「ポジティブ・オフ」運動に賛同。人々のワークライフバランスの実現に向け、官民一体となった取り組みに協力しています。

※政府からの昨年比一律15%の電気量削減は、本社が入居する渋谷ファーストタワーの管理会社に課せられ、ぴあもその要請に協力しました。



ぴあグループの第2四半期連結業績

	前第2四半期 (2010年4月1日～ 2010年9月30日)	当第2四半期 (2011年4月1日～ 2011年9月30日)	前期 (2010年4月1日～ 2011年3月31日)
売上高 (百万円)	48,747	47,938	92,664
経常利益 (百万円)	16	△ 118	30
四半期(当期)純利益 (百万円)	91	△ 130	92
純資産額 (百万円)	3,900	3,772	3,900
総資産額 (百万円)	19,547	19,931	22,974
1株当たり純資産額 (円)	274.40	265.21	274.40
1株当たり四半期(当期)純利益 (EPS) (円)	6.51	△ 9.27	6.56
自己資本比率 (%)	19.8	18.7	16.8

全体概況

ぴあグループの2011年度(第2四半期)における連結業績は、2011年3月に発生した東日本大震災により、メディア・コンテンツ事業においてレジャー関連商品を中心とした販売・広告収入の減少などの影響を受けており、一部チケット販売の回復が見られたことや前期に断行した各種構造改革及びコスト削減による効果が発現したものの、売上・利益とも前年同期を下回っております。

■セグメント別概況

ライブ・エンタテインメント関連事業

チケット販売は、国内ポップス系の大型興行、韓流イベント、関西エリアでの販売においては比較的好調に推移したものの、スポーツ・レジャー関連においては震災の影響を受けております。一方、この間お客様の利便性の向上や購買行動の促進を図ってまいりましたインターネットでのチケット販売は、震災後も順調に拡大しており、「ぴあ会員」は9月末に922万人(前期末831万人、前々期末709万人)に達しております。その結果、売上高は457億72百万円(対前年同期比99.2%)、営業利益は4億15百万円(対前年同期比54百万円増加)となりました。

メディア・コンテンツ事業

出版販売や広告市場が厳しい状況にあるなかで、引き続き、編集・製作コストの削減や配本の効率化による収益性の改善を図っておりますが、当第2四半期連結累計期間においては、震災の影響を受けるかたちで前期末に発行した不定刊誌の返本の増加や発行点数の減少、加えてレジャー関連MOOK本の販売減少を余儀なくされました。また、この間進めてきた

この結果、ぴあグループの第2四半期連結累計期間の業績は、連結売上高479億38百万円(対前年同期比98.3%)、営業損失1億4百万円(対前年同期比1億22百万円悪化)、経常損失1億18百万円(対前年同期比1億35百万円悪化)、四半期純損失1億30百万円(対前年同期比2億22百万円悪化)となりました。

構造改革の一環として、1972年7月に創刊し39年にわたり発行してまいりました情報誌「ぴあ」(首都圏版)を2011年7月21日発売号をもって休刊しております。その結果、売上高は21億19百万円(対前年同期比83.8%)、営業損失は1億50百万円(対前年同期比1億92百万円悪化)となりました。

■通期の見込み

なお、通期の予想につきましては、先行きの経済環境が引き続き不透明であることをふまえ、当初(8月時点)の予想数値に変更はございません。

連結業績予想と実績

(単位:百万円)

	第2四半期累計		通期
	当初予想	実績	当初予想
売上高	45,500	47,938	92,500
営業損益	△ 300	△ 104	50
経常損益	△ 310	△ 118	30
四半期(当期)純損益	△ 320	△ 130	10

連結財務諸表

連結貸借対照表

(単位:百万円未満切捨て)

科目	期別	前期末 (2011年3月31日現在)	当第2四半期末 (2011年9月30日現在)	科目	期別	前期末 (2011年3月31日現在)	当第2四半期末 (2011年9月30日現在)
資産の部				負債の部			
現金及び預金		9,496	5,536	買掛金		14,507	11,501
受取手形及び売掛金		7,965	8,974	短期借入金		200	200
商品及び製品		74	53	1年内返済予定の長期借入金		788	932
仕掛品		19	1	未払金・未払法人税等		944	592
原材料及び貯蔵品		6	6	賞与引当金		3	4
その他		778	1,350	その他		1,435	1,667
貸倒引当金		△ 27	△ 38	I 流動負債		17,879	14,898
I 流動資産		18,313	15,884	長期借入金		620	679
有形固定資産		339	309	退職給付引当金		63	66
ソフトウェア		3,075	2,494	役員退職慰労引当金		100	99
ソフトウェア仮勘定		41	7	その他		410	416
のれん		12	10	II 固定負債		1,195	1,260
その他		61	61	負債合計		19,074	16,158
無形固定資産		3,191	2,574	純資産の部			
投資有価証券		323	357	資本金		4,239	4,239
その他		1,185	1,151	資本剰余金		402	402
貸倒引当金		△ 378	△ 345	利益剰余金		△ 697	△ 828
投資その他の資産		1,129	1,163	自己株式		△ 61	△ 61
II 固定資産		4,660	4,046	I 株主資本		3,882	3,752
資産合計		22,974	19,931	II その他の包括利益累計額		△ 21	△ 20
				III 少数株主持分		39	40
				純資産合計		3,900	3,772
				負債純資産合計		22,974	19,931

連結財務諸表

連結損益計算書

(単位:百万円未満切捨て)

科目	期別	前第2四半期 (2010年4月1日~ 2010年9月30日)	当第2四半期 (2011年4月1日~ 2011年9月30日)
売上高		48,747	47,938
売上原価		44,873	44,025
売上総利益		3,874	3,912
返品調整引当金戻入額		278	298
返品調整引当金繰入額		247	242
差引売上総利益		3,905	3,968
販売費及び一般管理費		3,886	4,072
営業利益又は営業損失(△)		18	△104
営業外収益		17	16
営業外費用		19	30
経常利益又は経常損失(△)		16	△118
特別利益		194	-
特別損失		109	-
税金等調整前四半期純利益又は税金等調整前四半期純損失(△)		101	△118
法人税、住民税及び事業税		9	13
法人税等調整額		0	△2
少数株主利益		0	1
四半期純利益又は四半期純損失(△)		91	△130

連結包括利益計算書

(単位:百万円未満切捨て)

科目	期別	前第2四半期 (2010年4月1日~ 2010年9月30日)	当第2四半期 (2011年4月1日~ 2011年9月30日)
少数株主損益調整前四半期純利益又は少数株主損益調整前四半期純損失(△)		91	△129
その他の包括利益		△2	1
四半期包括利益		88	△128

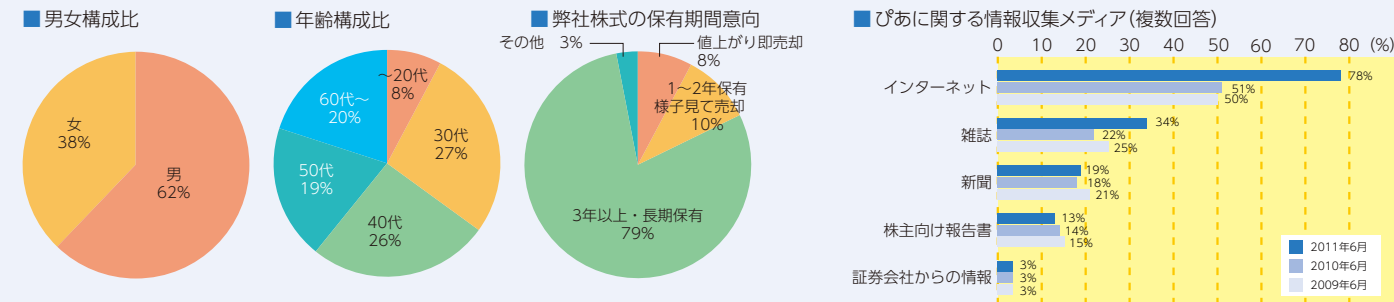
連結キャッシュ・フロー計算書

(単位:百万円未満切捨て)

科目	期別	前第2四半期 (2010年4月1日~ 2010年9月30日)	当第2四半期 (2011年4月1日~ 2011年9月30日)
営業活動によるキャッシュ・フロー		500	△3,856
投資活動によるキャッシュ・フロー		△222	△305
財務活動によるキャッシュ・フロー		△329	202
現金及び現金同等物に係る換算差額		△0	△0
現金及び現金同等物の増減額(△は減少)		△51	△3,960
現金及び現金同等物の期首残高		5,392	9,496
現金及び現金同等物の四半期末残高		5,340	5,536

株主アンケート結果報告

2010年度報告書に同封いたしましたアンケートにご協力いただき、ありがとうございます。今回は約6,700名の株主の皆様から、貴重なご意見・ご要望をお寄せいただきました。ここに、集計結果の一部をご紹介します。



会社概要 (2011年9月30日現在)

商号	ぴあ株式会社 (PIA CORPORATION)
本店所在地	東京都渋谷区東1-2-20 渋谷ファーストタワー
設立	1974年12月
資本金	4,239,158千円
発行済株式総数	14,092,913株
社員数(連結)	253名
会計監査人	有限責任 監査法人トーマツ
役員	
代表取締役社長	矢内 廣
取締役	林 和男
取締役	白井 衛
取締役	唐沢 徹
取締役	木本 敬巳
取締役	夏野 剛
取締役(社外)	佐久間 昇二
取締役(社外)	富山 和彦
取締役(社外)	後藤 克弘
監査役(社外)	入江 雄三
監査役	斎藤 廣一
監査役	能勢 正幸
監査役(社外)	松田 政行
監査役(社外)	新井 誠

主要グループ会社

ぴあデジタルコミュニケーションズ株式会社	所在地/〒150-0011 東京都渋谷区東1-2-20 渋谷ファーストタワー
事業内容/コンテンツメディア(紙媒体・Web・モバイル)の企画・開発・販売・コンサルティング及び各種プロモーションの企画・開発業務	
チケットぴあ名古屋株式会社	所在地/〒461-0005 愛知県名古屋市中区東2-13-32 ぴあ名古屋ビル
事業内容/中部地区におけるコンピュータチケットサービス事業	
チケットぴあ九州株式会社	所在地/〒810-0001 福岡県福岡市中央区天神3-15-24 三天第一ビル5F
事業内容/九州地区におけるコンピュータチケットサービス事業	
株式会社東京音協	所在地/〒150-0011 東京都渋谷区東1-2-20 渋谷ファーストタワー
事業内容/音楽・演劇・スポーツ・映画・その他イベントの開催、チケット販売並びに情報提供	

株式の状況 (2011年9月30日現在)

発行可能株式総数	33,000,000株	
発行済株式総数	14,092,913株	
株主数	21,667名	
大株主		
株主名	所有株数(株)	持株比率(%)
矢内 廣	2,900,100	20.58
株式会社セブン&アイ・ホールディングス	1,409,400	10.00
凸版印刷株式会社	1,087,709	7.72
株式会社セブン&アイ・ネットメディア	704,700	5.00
株式会社セブン・イレブン・ジャパン	704,700	5.00
斎藤 廣一	626,300	4.44
株式会社経営共創基盤	481,800	3.42
林 和男	476,300	3.38
株式会社ピー・エス	445,800	3.16
矢内アセットマネジメント株式会社	322,000	2.28
日本トラスティ・サービス信託銀行株式会社(信託口)	286,700	2.03
丸紅株式会社	150,000	1.06
株式会社電通	148,600	1.05
スカパー JSAT 株式会社	117,309	0.83
ぴあ従業員持株会	102,380	0.73
三菱UFJニコス株式会社	100,000	0.71
エヌ・ティ・ティ・コミュニケーションズ株式会社	100,000	0.71
京セラ株式会社	100,000	0.71
日本マスタートラスト信託銀行株式会社(信託口)	93,800	0.67
(個人)	50,000	0.35
野村證券株式会社	45,000	0.32
(個人)	43,600	0.31
株式会社WOWOW	35,000	0.25
株式会社エフエム東京	35,000	0.25
株式会社フジ・メディア・ホールディングス	33,500	0.24
能勢 正幸	32,000	0.23
米沢信用金庫	30,000	0.21
日本テレビ放送網株式会社	30,000	0.21
ソニー株式会社	30,000	0.21
株式会社ジェイティービー	29,200	0.21



ぴあ株式会社

〒150-0011 東京都渋谷区東1-2-20 渋谷ファーストタワー
TEL (03) 5774-5200 (大代表)
<http://www.pia.co.jp/pia>

株主メモ

事業年度	毎年4月1日から翌年3月31日まで
定時株主総会	6月中
配当受領株主確定日	毎年3月31日 (中間配当を実施するときの株主確定日は、9月30日です)
公告方法	電子公告 <URL> http://www.pia.co.jp/pia (ただし、事故その他やむを得ない事由によって電子公告による) 公告をすることができない場合は、日本経済新聞にて行います。)
株主名簿管理人	住友信託銀行株式会社 証券代行部
事務取扱場所	東京都中央区八重洲二丁目3番1号 〒183-8701 東京都府中市日鋼町1番10 住友信託銀行株式会社 証券代行部
郵便物送付先	〒183-8701 東京都府中市日鋼町1番10 住友信託銀行株式会社 証券代行部
電話お問い合せ先	電話 0120-176-417
インターネット ホームページURL	http://www.sumitomotrust.co.jp/STA/retail/service/daiko/index.html
特別口座管理機関	みずほ信託銀行株式会社 本店 証券代行部
事務取扱場所	東京都中央区八重洲一丁目2番1号 〒168-8507 東京都杉並区和泉二丁目8番4号 みずほ信託銀行株式会社 証券代行部
郵便物送付先	東京都杉並区和泉二丁目8番4号 みずほ信託銀行株式会社 証券代行部
電話お問い合せ先	電話 0120-288-324
単元株式数	100株

※住所変更等の事務手続きは、お取引の証券会社等にてお手続き下さい。

株主優待制度について

2011年3月31日現在の株主の皆様に対し、株主優待を実施しています。

1. 優待品目と事前選択

チケットぴあギフトカード、オリジナル図書カード、オリジナルシネマギフトカードの3品目。

下記優待金額の範囲内で、自由に組み合わせて事前選択していただくことができます。

2. 優待区分

株式保有期間 期末保有株式数	2期以上(1年超) 継続保有の場合	保有期間が 左記に満たない場合
100株以上1,000株未満	5,000円分	2,500円分
1,000株以上	11,000円分	5,500円分

